

公演日程

A program

第1676回 NHKホール
6/5[土] 開演 6:00pm
6/6[日] 開演 3:00pm

The 1676th Subscription Concert
on 5th (Sat.) & 6th (Sun.) Jun.
at 6:00pm (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 ウラディーミル・アシュケナージ
チェロ デーヴィッド・コーエン
コンサートマスター 堀 正文

Vladimir Ashkenazy, conductor
David Cohen, cello
Masafumi Hori, concertmaster

ドヴォルザーク/チェロ協奏曲 口短調 作品104 (42')

Antonin Dvořák (1841-1904)
Cello Concerto b minor op.104

I アレグロ
II アダージョ・マ・ノン・トロッポ
III 終曲：アレグロ・モデラート

I Allegro
II Adagio, ma non troppo
III Finale : Allegro moderato

休憩

Intermission

ドヴォルザーク/交響曲 第8番 ト長調 作品88 (34')

Antonin Dvořák
Symphony No.8 G major op.88

I アレグロ・コン・ブリオ
II アダージョ
III アレグレット・グラツィオーソ
IV アレグロ・マ・ノン・トロッポ

I Allegro con brio
II Adagio
III Allegretto grazioso
IV Allegro ma non troppo

今月の開演前の室内楽

Aプロ	6/ 5(土) 6(日)	5:15pm~ 2:15pm~
Cプロ	6/ 11(金) 12(土)	6:15pm~ 2:15pm~

<出演> 佐藤由起(ファゴット)、大宮臨太郎(ヴァイオリン)
御法川雄矢(ヴィオラ)、宮坂拓志(チェロ)

<曲目> ドヴィエンヌ/ファゴット四重奏曲 第2番 作品73

<場所> NHKホール2階北側ロビー

公演日程

B program

第1678回 サントリーホール
6/16[水] 開演 7:00pm
6/17[木] 開演 7:00pm

The 1678th Subscription Concert
on 16th (Wed.) & 17th (Thu.) Jun.
at 7:00pm in the Suntory Hall

～マーラー生誕150年～

～The 150th Anniversary of Mahler's Birth～

指揮 ウラディーミル・アシュケナージ
コンサートマスター 篠崎史紀

Vladimir Ashkenazy, conductor
Fuminori Shinozaki, concertmaster

マーラー／交響曲 第6番 イ短調「悲劇的」(80')

Gustav Mahler (1860-1911)
Symphony No.6 a minor "Tragisch"

- I アレグロ・エネルジコ・マ・ノン・トロッポ：
激しく、しかしきびきびと
- II アンダンテ・モデラート
- III スケルツォ：重々しく
- IV 終曲：アレグロ・モデラート

- I Allegro energico, ma non troppo.
Heftig, aber markig
- II Andante moderato
- III Scherzo : Wuchtig
- IV Finale : Allegro moderato

●この公演に休憩はございません。あらかじめご了承下さい。

●This concert will be performed with no intermission.

公演日程

C program

第1677回 NHKホール
6/11[金] 開演 7:00pm
6/12[土] 開演 3:00pm

The 1677th Subscription Concert
on 11th (Fri.) & 12th (Sat.) Jun.
at 7:00pm (Fri.) 3:00pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 ウラディーミル・アシケナージ
クラリネット ディミトリ・アシケナージ
オルガン 勝山雅世*
コンサートマスター 堀 正文

Vladimir Ashkenazy, conductor
Dimitri Ashkenazy, clarinet
Masayo Katsuyama, organ*
Masafumi Hori, concertmaster

フォーレ／組曲「ペレアスとメリザンド」作品80 (17')

Gabriel Fauré (1845-1924)
Pelléas et Mélisande, suite op.80

- I 前奏曲
- II 糸を紡ぐ女
- III シチリア舞曲
- IV メリザンドの死

- I Prélude
- II Fileuse
- III Sicilienne
- IV Mort de Mélisande

フランセ／クラリネット協奏曲 (24')

Jean Françaix (1912-1997)
Clarinet Concerto

- I アレグロ
- II スケルツァンド
- III アンダンティーノ
- IV アレグリッシモ

- I Allegro
- II Scherzando
- III Andantino
- IV Allegrissimo

休憩

Intermission

サン・サーンス／交響曲 第3番 八短調 作品78 (37') *

Camille Saint-Saëns (1835-1921)
Symphony No.3 c minor op.78*

- I アダージョ — アレグロ・モデラート — ポーコ・アダージョ
- II アレグロ・モデラート — プレスト
— アレグロ・モデラート — プレスト — マエストロ
— アレグロ

- I Adagio - Allegro moderato - Poco Adagio
- II Allegro moderato - Presto
- Allegro moderato - Presto - Maestoso
- Allegro

●お詫びと訂正

4月定期公演パンフレット5ページの下から7~8行目に以下の誤りがありました。
お詫びとともに訂正させていただきます。

誤：(ボックス・セット)をリリース。伝説的な「さよならコンサート」でのブルックナー《交響曲第8番》も収められている。

正：(ボックス・セット)がリリースされているほか、伝説的な「さよならコンサート」でのブルックナー《交響曲第8番》もリリースされている。



©E.Sakata

指揮 conductor

ウラディーミル・アシュケナージ

Vladimir Ashkenazy

旧ソ連邦ゴリキー生まれ。モスクワ音楽院でピアノを学び、1955年ショパン国際ピアノ・コンクールで第2位、1956年エリザベト王妃国際音楽コンクールおよび1962年チャイコフスキー国際コンクールで優勝。ソヴィエトの生んだ気鋭のピアニストとしてキャリアをスタートさせた。1970年以降は指揮活動も活発に行うようになり、フィルハーモニア管弦楽団およびクリヴランド管弦楽団首席客演指揮者、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督、ベルリン・ドイツ交響楽団首席指揮者・音楽監督を歴任。1998～2003年チェコ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者を務めた。

N響定期公演への初登壇は、2000年10月。2004年9月N響第2代音楽監督に就任した。

N響とは録音も多く、「ラヴェル・管弦楽作品集」（2003年録音）をはじめ、ベートーヴェン《交響曲第4番》《第5番》（2004）《第9番》（2005年末ライブ）《第2番》《第3番》（2006）《第1番》《第8番》《第6番「田園」》《第7番》（2007）、モーツァルト《ピアノ協奏曲第9番「ジュノム」》《同・第27番》（2004、アシュケナージによるピアノ）、2004～07年にかけて録音したチャイコフスキー交響曲全集、また各国のオケとのショスタコーヴィチ交響曲全集のなかでは《第4番》《第13番「バビ・ヤール」》《第14番「死者の歌」》をN響と録音（2007年発売）、そして、N響と録音したチャイコフスキーの《交響曲第5番》が今年の2月にリリースされた。

2007年6月公演がN響音楽監督として最後の定期となり、2007年9月1日N響桂冠指揮者に就任。現在、フィルハーモニア管弦楽団およびアイスランド交響楽団桂冠指揮者、EUユース・オーケストラ音楽監督を務めるほか、世界主要オーケストラへの客演も活発に行っている。2009年からシドニー交響楽団の首席&アーティスティック・アドバイザーに就任している。

チェロ cello

デーヴィッド・コーエン

David Cohen



3年前、2007年に日本へ初登場、NHK交響楽団と共にチャイコフスキー《ロココ風の主題による変奏曲》を好演したベルギー出身のチェリスト、デーヴィッド・コーエンが、このたびは言うまでもないチェロ・レパートリー中の金字塔、ドヴォルザークの協奏曲を、アシケナージの棒により聴かせる。今年ちょうど30歳になる充実期のチェリストにとって、意気込みはいかばかりかと察せられよう。

前回の来演に先立って筆者は彼のレコーディングから、プロッホの《ソロモン(シェロモ)》、ラロの《チェロ協奏曲》、ヒンデミットの《無伴奏チェロ・ソナタ》などを聴き、非常にしっかりした技術を身につけていると同時に、作品の内面にまで分け入って豊かなファンタジーとイマジネーションを汲み出してくる彼の才能に大きな期待を覚えたのであった。したがって、そのような意味でこそ、今回彼が示すであろう成果が、ざらにはないものになるので

はないか、と思うのである。

彼が具えているそうした音楽性は、もとより天分もあるのだろうが、同時に、チェリストとしての大切な形成期において、2人の卓越した音楽家かつ偉大なヒューマニストであった人たちから、とくに目をかけられたという事実も忘れられまい。1人は、1999年に亡くなるまでの数年間、コーエンにとって「精神上の父」であったというユーディ・メニューイン。もう1人は、マスタークラスで彼を知って以来、ことごとくに援助を惜しまなかったというムスティスラフ・ロストロポーヴィチである。とすればデーヴィッド・コーエンは、音楽界に現れた素晴らしいヒューマニズムの伝統を継承する存在、とすら信じられよう。心して耳を傾けたい。

(濱田滋郎)

クラリネット clarinet

ディミトリ・アシュケナージ

Dimitri Ashkenazy



©Jean Mayerat

Cプログラムでフランスの《クラリネット協奏曲》のソロを担当するディミトリ・アシュケナージは、その名前から分かるように、N響桂冠指揮者ウラディーミル・アシュケナージの次男として1969年にニューヨークで生まれた。当初は父や兄ヴォフカと同じようにピアノの勉強をしていたが、10歳のときにクラリネットに転向。ミラノ・スカラ座管弦楽団の奏者だったジャン・バッティスタ・シシーニに師事するようになり、スイスのルツェルン音楽院で学んだ。

卒業後、ソロや室内楽の活動を積極的に始めるが、シシーニやクリーヴランド管弦楽団のフランクリン・コーエンに学んだ彼のスリムで柔軟なスタイルは、既成のレパートリーだけでなく、あらゆるスタイルの音楽を手中に収め、流派を超えた幅広い音楽活動をするようになった。その結果、アメリカ国内にとどまらず、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、チェコ・フィルハーモニー

管弦楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、水戸室内管弦楽団など世界のさまざまなオーケストラと共演。室内楽では、コダーイ弦楽四重奏団、ファウスト弦楽四重奏団、バーバラ・ボニー、ヘルムート・ドイッチュ、エディタ・グルベローヴァ、アントニオ・メネゼスらと共演している。

新作にも意欲的に取り組んでおり、これまでに、マルコ・トゥーティノやフィリッポ・デル・コルノの協奏曲、ピーター・マクスウェル・デーヴィスの《クラリネット五重奏曲「アルテミス・ロケイアへの賛歌」》の世界初演を行った。

今回演奏されるフランスの協奏曲も、ディミトリが得意とするレパートリーであり、父の伴奏でどのような音楽を聴かせてくれるか楽しみである。

(佐伯茂樹)

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 口短調 作品104

ドヴォルザーク(1841-1904)には広く知られた3曲の協奏曲がある。《ピアノ協奏曲》ト短調 作品33と《ヴァイオリン協奏曲》イ短調 作品53、そして、《チェロ協奏曲》口短調 作品104である。しかし、これら以外に、協奏的作品として、ヴァイオリンのための《ロマンス》や《マズレク》、チェロのための《ロンド》や《森の静けさ》といった小品があり、さらに初期にはオーケストラ版こそ作成されていないが、ピアノ伴奏による《チェロ協奏曲》イ長調という作品も残されている。多楽章の協奏曲と単一楽章の協奏的作品をあわせて8曲残したわけであるが、そのうちの4曲がチェロをソロ楽器としたものであり、また、協奏曲創作の最初と最後がチェロ協奏曲というのも興味深い。

古今東西のチェロ協奏曲の最高傑作とされる《口短調協奏曲》は1892年9月から1895年4月までの2年半のアメリカ滞在(但し、1894年の6月から9月の丸4か月は夏休暇でプラハに帰郷している)の最後の半年間ほどで作曲されている。作品成立には故郷の友人でもあるチェロの名手ハヌシュ・ヴィハン(1855-1920)の作曲依頼と考えられているが、着手の直接のきっかけは、休暇からアメリカに戻った1894年10月にアントン・ザイドル(1850-1898)指揮するニューヨーク・フィルハーモニックの演奏会で初演されたヴィクター・A.ハーバート(1859-1924)作曲(自ら初演ソリストを務めた)の《チェロ協奏曲第2番》ホ短調を聴いたことによるとされる。

第1楽章 アレグロ 口短調 4/4拍子。構成は厳格なほど古典的な協奏ソナタ形式をとっている。クラリネットによる第1主題提示に始まり、二長調の第2主題はホルンによって提示される。このオーケストラ提示部を経て、クワジ・インプロヴィザンド(即興風な趣をもって)と指示されたチェロが改めて主題を提示し、発展してゆく。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロポ ト長調 3/4拍子。オーボエとファゴットを従えた豊かなハーモニーのなかでクラリネットが主題を提示し、これを追うチェロのソロとの二重奏を中心に叙情的な緩徐楽章が進む。

第3楽章 終曲:アレグロ・モデラート 口短調 2/4拍子。低弦部の序奏に導かれてホルンが三重奏で提示する行進曲調のロンド主題とボヘミア風叙情を湛えたチェロ主題によってロンド・フィナーレが築かれてゆく。終結は口長調の明るい響きとなる。

作曲年代 : 1894年11月~1895年2月に作曲、1895年6月11日に改訂

初演 : 1896年3月19日、ロンドンのフィルハーモニー協会演奏会で、作曲家の指揮、レオポルト・スターン(1862-1904)のチェロ・ソロ

楽器編成 : フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、弦楽、チェロ・ソロ

(平野 昭)

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

1889年の夏、ドヴォルザークは、ボヘミアの小さな村、ヴィソカーに建てたお気に入りのお別荘で充実した創作の時を送っていた。祖国チェコはもちろんのこと、ドイツ、オーストリアさらにはイギリスでも名声を確立し、いまや国際的な大家と認められたドヴォルザーク。大いなる自然と気のおけない人々に囲まれて、音楽は泉のように彼の内から湧き出してくる。この時期に、彼が旧知の友に宛てて、次のような手紙を書いていることは有名だ。「頭が音楽でいっぱいなのです。発想をそのまますぐに書き寄せたらいいのに、とつくづく思います。でも仕方ありません。たとえゆっくりであっても、手が動く限り書き続けなくてはなりません。あとは神様にお任せするしかないでしょう…期待以上のものができることが多く、自然にメロディーが頭のなかに湧いてきます」(岡本和子氏の訳をお借りした)。ドヴォルザークの《交響曲第8番》は、このような幸福な靈感に守護されて書かれた作品であり、同時期のオペラ《ジャコバン党员》、《レクイエム》あるいは《ピアノ三重奏曲「ドゥムキー」》とともに、彼の傑作の森を形作っている。

この作品が、かつては「イギリス」の名で呼ばれることもあった、と聞くと意外に思われるかもしれない。しかし、これは音

楽の内容と関係する呼び名ではなく、この作品の出版を請け負ったノヴェロがイギリスの出版社だったから、という極めて現実的な理由による(ちなみに、このときは「第4番」と番号が打たれていた)。ドヴォルザークは、これまで専属出版契約を結んでいたベルリンのジムロックから、経済的また精神的に独立しうる時期に来ていたのだ。実際、《交響曲第8番》の音楽にイギリス的なところはどこにもない。ここで出会うのは、わたしたちがまさに「チェコの」という言葉で理解している、あの優しくも素朴な調べ、ドヴォルザークにしてはじめて可能な、あの温かい調べなのだ。

全体は、急一緩一トリオ付きの舞曲一急の4楽章構成。大枠としては古典的な交響曲の規範に従ってはいるのだが、各楽章の中身はかなり自由なものと感じられるだろう。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ。ソナタ形式を借りながら、生命の喜びに満ちたいくつもの歌が、大切に歌い継がれていく。しかも、これらの歌はいつでもどこかでつながり合っている(譜例参照)。友人であったブラームス、あるいはブラームスを経由して学びとったシューベルトの息吹が、新たな体を得てここに生きている。

第2楽章はアダージョ。ドヴォルザークが

チェロ、クラリネット

〔譜例1〕 

↓

フルート

〔譜例2〕 

↓

ヴィオラ、チェロ

〔譜例3〕 

↓

弦楽器

〔譜例4〕 

↓

フルート

〔譜例5〕 

愛してやまないボヘミアの自然への讃歌というべきか。鳥の歌をはじめ、大いなる自然の音がこだまする。**第3楽章**はアレグレット・グラツィオーソ。これはワルツ風のトリオが組み込まれた憂愁のスケルツォ。誰にも真似のできないドヴォルザークの旋律がここにある。**第4楽章**はアレグロ・マ・ノン・トロppo。ここではソナタ形式と変奏曲が融合する。静かに歌いだされる主題が、ついには誇り高き民衆の歓呼の声へと発展していく。

ドヴォルザークの《交響曲第8番》にあるのは最良の意味での名人芸である。古典的な規範への盲従もなければ、そこからの故意の逸脱もない。最初の手紙にも引用した、ドヴォルザークの内からあふれ

出てくる作曲家自身の芸術的直感が、彼を導く新たな規範となつて、自由な音楽を作り上げていくのだ。交響曲の伝統にして独創的な発展。ドヴォルザークの《第8番》は、その意味で、19世紀交響曲の精華というべき作品なのである。

作曲年代：1889年8月26日～同年11月8日
初演：1890年2月2日、プラハ。ドヴォルザーク自身の指揮による

楽器編成：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2（イングリッシュホルン1）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、弦楽

（藤田 茂）

マーラー

交響曲 第6番 イ短調「悲劇的」

グスタフ・マーラー（1860-1911）は、指揮活動を行う傍ら夏期休暇の間に郊外の別荘で作曲を行う習慣があった。そして《交響曲第6番》は1903年と1904年の夏にオーストリア南部にあるヴェルター湖畔のマイアーニヒで作曲された。

この当時のマーラーはウィーン宮廷歌劇場の芸術監督およびウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者として確固たる地位を築いており、また彼の妻アルマ・マーラーの証言によればこの交響曲の創作の際には精神状態がきわめて良かったという。さらに1904年には次女のアンナ・ユスティエネが誕生し、夏には家族揃って別荘で過ごした。つまり《交響曲第6番》を作曲していた当時のマーラーは幸福の絶頂にいたのである。

この交響曲の様式的特徴としては、形式構造や楽章配置における伝統回帰と楽器法における斬新さという二面性を見ることができよう。つまり両端楽章を古典的なソナタ形式で作りその間にスケルツォと緩徐楽章を配置するというきわめて伝統的な楽章構成を取っている一方で、カウベル（第1、第3、第4楽章）や低音の鐘（第4楽章）、ハンマー（第4楽章）など、およそ楽器とは呼べないものを打楽器として用いるという大胆な試みも見られるのである。

またこれらの打楽器のなかでも第4楽章で用いられるハンマーは、標題的にも特に重要な意味を持っている。アルマの語るところによればそれは「運命の打撃」であり、英雄（マーラー自身？）が打ちのめ

される様子を表しているという。そしてマーラーはこの曲の初演の翌年（1907年）に心臓病であることが発覚した。つまり自分自身が破滅に陥ったのである。

またこの交響曲と同時期に、マーラーは妻の反対にもかかわらず《なき子をしのぶ歌》を作曲し、その3年後には実際に長女のマリア・アンナを亡くしている。

マーラーは仕事においても家庭においても充実していた時期にこのような曲を作っており、さらにマーラー自身この《交響曲第6番》に「悲劇的」と名付けた。アルマ・マーラーはこの曲について、「彼の一生を先取りして音楽化したのだ」と述べている。

第1楽章 アレグロ・エネルジコ・マ・ノン・トロppo: 激しく、しかしきびきびと イ短調 4/4拍子 ソナタ形式。この楽章はきわめて伝統的なソナタ形式で作られている。それは提示部に付けられた反復記号や、徹底した動機労作などに見ることができよう。行進曲風の第1主題(譜例1)に対し、続く推移動機は、第1主題とは異質のコーラル風の旋律であるが、対声部は第1主題の変形でできている。そして妻のアルマを描いたといわれる第2主題(譜例2)にも第1主題の素材が用いられている。また推移部に登場する譜例3の動機は第2、第4楽章にも現れる。このような動機的関連性の重視は、この時代には一般的な特徴であった。しかしマーラーの場合、彼の初期の交響曲では相互に関連性のない動機を並置させる手法が目立っており、それ



〔譜例3〕

トランペット、オーボエ

ティンパニ

に較べるとこの曲の作り方はむしろ対照的である。

第2楽章 スケルツォ：重々しく イ短調 3/8拍子。A-B-A-B-Aという構成のスケルツォ。主題Aは3拍子でありながらも力強い行進曲風の曲想で、グロテスクですらある。一方主題BはAとは対照的に牧歌的な性格である。

第3楽章 アンダンテ・モデラート 変ホ長調 4/4拍子。この楽章は他の楽章とは異なり特定の形式に当てはまらない。曲中には限られた動機しか現れないものの、甘美な冒頭部分やカウベルを用いた牧歌的な部分、悲痛に満ちた劇的な部分など、楽章を通じて豊かで多様な曲想の変化が見られる。

第4楽章 終曲：アレグロ・モデラート イ短調 4/4拍子 ソナタ形式。この楽章は第1楽章と同様に伝統的なソナタ形式で書かれている。しかしその一方で前述の多彩な打楽器が用いられることで斬新な音色が生み出される。中でも、すでに述べたようにハンマーは「運命の打撃」の象徴であり、アルマによれば「3度目の打撃で英

雄が倒れる」という。全集版ではハンマーは展開部で2回登場するのみであり、コーダで用いられる3度目のハンマーは改訂の際に削除されている。しかしそれでも、曲の最後は短調になってフォルティッシモで衝撃的に閉じられるため、「悲劇的」な性格が失われることはない。

作曲年代：1903年～1904年

初演：1906年5月27日、エッセン、マラー自身の指揮による

楽器編成：フルート4(ピッコロ2)、ピッコロ1、オーボエ4(イングリッシュホルン2)、イングリッシュホルン1、クラリネット3、Esクラリネット1、バスクラリネット1、ファゴット4、コントラファゴット1、ホルン8、トランペット6、トロンボーン4、チューバ1、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、小太鼓、グロッケンシュピール、カウベル、低音の鐘、ムチ、ハンマー、シロフォン、トライアングル、タムタム、ハープ2、チェレスタ1、弦楽

(佐野旭司)

フォーレ

組曲「ペレアスとメリザンド」作品80

象徴派の詩人メーテルリンクの戯曲『ペレアスとメリザンド』は、1893年のパリ初演以来、芸術家の大きな反響を呼んだ。ドビュッシーの同名のオペラをはじめシェーンベルク、シベリウスらが作曲した一連の作品は、この戯曲が作曲家にもたらした豊かな音楽的発想を知る上で興味深い。そのひとつ、ガブリエル・フォーレ(1845-1924)の組曲《ペレアスとメリザンド》は、1898年に発表された劇付随音楽を基に、作曲家自身が4曲からなる演奏会用組曲(第1稿は「シチリア舞曲」を除く3曲)に編んだものである。

物語は、素性不明の美しい娘メリザンド、彼女を妻にする王子ゴロー、その弟ペレアスをめぐる悲劇で、死の影に怯えながらも運命の力に従う人間の姿が、暗示的かつ夢幻的に描き出される。この戯曲(英訳版)のロンドン上演を計画した女優キャンベル夫人は、ドビュッシーのオペラを付随音楽に流用するという当初の提案を拒否され、フォーレに作曲を依頼した。舞台初演は大成功を収め、今日では組曲版が親しまれている。簡素で優美な旋律、流動的な和声が、淡い憂いを帯びた管弦楽の色彩とあいまった、フォーレならではの香気と抒情に満ちた佳曲である。

第1曲「前奏曲」:クワジ・アダージョ ホ短調 3/4拍子。劇では森で猟をするゴローとメリザンドの出会いを導く。弦による優美な「メリザンドの主題」のそこはかと

い哀しみを帯びた調べは、作品全体を控えめに統一する。**第2曲「糸を紡ぐ女」:**アンダンティーノ・クワジ・アレグレット ト長調 3/4拍子。糸車を模した細かな三連符上で、メリザンドの主題の変奏が続く。**第3曲「シチリア舞曲」:**アレグレット・モルト・モデラート ト短調 6/8拍子。劇では第2曲より前に置かれ、泉で戯れるメリザンドとペレアスの場面を導く。この有名な小曲はフォーレの未完の劇音楽(1893年)からの転用で、流麗で繊細なフルートの旋律とハープの晴朗なアルペッジョが美しい。**第4曲「メリザンドの死」:**ニ短調 3/4拍子。別名「モルト・アダージョ」。メリザンドが最期を迎える場面を導き、葬送のリズムを伴った主題が悲愴に満ちて奏され、最後は安らかな清澄さに包まれる。

作曲年代: 1898~1900年(原曲の劇付随音楽は1898年4~5月)

初演: 1901年2月3日パリ、カミーユ・シュヴィヤール指揮、ラムルー管弦楽団(劇付随音楽は1898年6月21日ロンドン、フォーレ指揮、プリンス・オブ・ウェールズ劇場)。

楽器編成: フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、ハープ1、弦楽

(関野さとみ)

フランセ クラリネット協奏曲

20世紀フランスの作曲家ジャン・フランセ(1912-1997)は、同時代の前衛的な傾向とは一線を画し、洒脱でユーモアにあふれた着想、明晰な形式といったスタイルを貫き続けた。「フランス的気質」をいかにも感じさせるその作風は、斬新な和声、生き生きとしたリズムをはじめとする洗練された機知、優雅さと結びついて、シンプルながらも決して通俗に陥ることがない。

自らを古典主義的と認めていたフランセは、伝統的なジャンルを好んで作曲した。協奏曲もその1つで、管弦楽のほぼ全ての楽器のために協奏的な作品を残したが、それらは伝統的なスタイルに基づきつつ概して快活で、爽快な音楽が心地よく耳を駆け抜ける。この《クラリネット協奏曲》でも、フランセは耳を楽しませることを意図しているが、幅広い音域を縦横無尽に跳び回る息の長い旋律、急変するダイナミクスやリズムなど、クラリネット奏者にとってはかなりの難曲でもある。オーケストラも同様だが、小編成ながらさまざまな音に溢れ、新鮮な響きが追求されている点に、ストラヴィンスキーやラヴェルらに似た傾向が認められる。

全体は4楽章構成。**第1楽章**(アレグロイ長調 4/4拍子)はフルート、続いてクラリネットのソロが軽快な主題を上機嫌に

奏で、全体の爽快なスピード感を冒頭で設定する。主題の多彩な展開の後、即興的なカデンツァが奏される。**第2楽章**(スケルツァンド 二長調 3/8拍子)は、拍節感を狂わせる諧謔的なシンコペーションやアクセントが、さまざまな楽器でかけ合わされる。**第3楽章**(アンダンティーノ ホ短調 3/4拍子)は短い休息のひとつ。第2楽章のモチーフがソロとオーケストラによって叙情的に奏でられる。**第4楽章**(アレグリッシモ イ長調 6/8拍子)では、ソロとオーケストラが一層目まぐるしく、賑やかに技巧を披露し、カデンツァの後で第1楽章の主題が回想される。散々難しいことをやり抜いても壮大なフィナーレなどなく、さらりと終わるところにフランセ流の機知が窺える。

作曲年代：1967～68年

初演：1968年7月20日パリ、ジャック・ランスロのクラリネット、フェルナン・ウブラドゥー指揮、フェルナン・ウブラドゥー室内管弦楽団

楽器編成：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット1、ファゴット2、ホルン2、トランペット1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、弦楽、クラリネット・ソロ

(関野さとみ)

サン・サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78

フランス近代の代表的な作曲家であるカミーユ・サン・サーンス(1835-1921)はさまざまな分野に多くの作品を残したが、交響曲も例外ではなく、以下のように、番号のついた交響曲を3曲、番号なしの交響曲を2曲残した(他に未完の交響曲が3曲ある)。

交響曲 イ長調

1850年作曲

交響曲 第1番 変ホ長調 作品2

1853年作曲 1853年聖セシル協会

コンサートで初演(指揮スゲール)

交響曲 ヘ長調「首都ローマ」

1855-56年作曲 1857年パドルー

管弦楽団により初演

交響曲 第2番 イ短調 作品55

1859年作曲 1859年パドルー管弦

楽団により初演

交響曲 第3番 ハ短調 作品78

1885-86年作曲 1886年ロンドン

で初演

このなかで、現在、一般的なレパートリーに入っている作品は《第3番》だけだが、サン・サーンスは1850年代のフランスで交響曲を書き続けた希有な存在であり、彼の活動が1880年代以降のフランス音楽の黄金時代につながったのである。

《交響曲第3番》は、ロンドン・フィルハー

モニー協会の委嘱で1886年作曲され、同年5月のロンドン初演も、翌年のパリ初演も成功を博した。パリ初演の折、この曲に感激したシャルル・グノーは、指揮台を降りて楽屋に戻るサン・サーンスを見て「フランスのベートーヴェンが行く!」と叫んだという。

「オルガン付き」というニックネームがついていることから分かるように、この曲の楽器編成にはオルガンやピアノが加えられているのが特徴の1つで、サン・サーンスの精妙な管弦楽法によって、華麗で繊細な音の世界が広がっている。

この作品には「F.リストの思い出に」という献辞が添えられている。フランツ・リストはサン・サーンスのオルガニスト、ピアニスト、作曲家としての才能を早くから認め、1877年歌劇《サムソンとデリラ》のワイマールでの世界初演を助けた。一方、サン・サーンスは長年にわたりリスト作品の紹介に尽力した。《交響曲第3番》を献呈したいというサン・サーンスの申し出に対してリストは喜び、1886年6月19日付けでワイマールからサン・サーンスに次のような手紙を送っている「このような証しをご親切にも私に与えて下さって感謝しています。交響曲のロンドンでのご成功をととても喜んでます。パリでもほかの場所

でもその成功はクレシェンドしつづけるでしょう(…)」。しかし、リストは、その6週間後の7月31日に世を去ったため、出版譜を手にすることはできなかった。リストの訃報を聞いたサン・サーンスは「F.リストの思い出に」という献呈の辞に差しかえ、この作品を出版したのである。

曲は2楽章構成だが、内容的にはそれぞれの楽章が通常の2つの楽章をまとめた形をとっている。全曲を通じて循環主題が随所に、しかも緻密に用いられており、作品の構築性を高めている。

第1楽章 第1部 アダージョ ― アレグロ・モデラート ハ短調 6/8拍子、序奏つきの自由なソナタ形式。11小節の序奏の動機のなかには、すでに第1主題が内包されている。アレグロ・モデラートの主部は、16分音符で刻まれて始まる第1主題と、その一部から派生した変イ長調の循環主題が提示された後、甘美な第2主題が変ニ長調で現れる。第1主題と循環主題を素材にした展開部に続いて、ほぼ型どおりの再現部となり、しだいに静まる。

第1楽章 第2部 ポーコ・アダージョ 変ニ長調 4/4拍子 3部形式。オルガンに導かれて、弦楽器のユニゾンが甘美な主要主題を奏でる。

第2楽章 第1部 アレグロ・モデラート ハ

短調 6/8拍子 ― プレスト ハ長調 ― アレグロ・モデラート ハ短調 ― プレスト 変イ長調。スケルツォ的な部分で、アレグロ・モデラートとプレストの2つの部分からなっている。

第2楽章 第2部 マエストーソ ハ長調 6/4拍子 ― アレグロ ハ長調 2分の2拍子。序奏つきの自由なソナタ形式。オルガンのハ長調の主和音の強奏が鳴り響くなか、荘厳な主題が対位的に扱われ、続いて、循環主題がピアノの分散和音を伴って現れる。やがて、アレグロでは、循環主題をもとにした第1主題と、表情豊かな第2主題、さらに序奏部の主題を中心に壮大に展開し、最後はハ長調の主和音の上に全曲が華々しく閉じられる。

作曲年代：1885～86年

初演：1886年5月19日、ロンドンのセント・ジェームズ・ホール。作曲者自身の指揮するロンドン・フィルハーモニー協会管弦楽団によって

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、オルガン1、ピアノ1(四手連弾)、弦楽

(井上さつき)

2010/11シーズンの定期公演 聴きどころ

■巨匠たちの熱いプロ

2010/11シーズンの指揮者陣は、巨匠とともに世界指揮界注目の中堅や若手も多数登場する布陣。イギリス音楽界の泰斗ネヴィル・マリナーで開幕し、ネルロ・サンティ、首席客演指揮者アンドレ・プレヴィン、名誉音楽監督シャルル・デュトワ等が今年も豪華なプログラムを携えてやってくる。

●開幕を飾るマリナーの9月

新シーズンの幕開けを飾る9月のマリナーのAプロは、シューマン・イヤー（生誕200年）に因みオール・シューマン。各国で確固たる評価を固めているアンティ・シエララを迎えての《ピアノ協奏曲》、《交響曲第3番「ライン」》に加え、《序曲、スケルツォとフィナーレ》という、ライブではなかなか巡り合えない名曲が冒頭に置かれており、マリナーのシューマン・プロは一味ちがう。

Cプロでは“ベト7”ことベートーヴェン《交響曲第7番》が取り上げられている。今や日本ではベスト10にランクインする人気作品だが、巨匠マリナーで、ぜひこの機に本格派の演奏を記憶に刻んでほし



マリナー ©Decca Friedrun Reinhold

い。20歳代前半の新進ミハイル・シモニアンのフレッシュなシベリウス《ヴァイオリン協奏曲》も組み込まれたCプロは、楽しさ盛りだくさんの一夜になるだろう。

●10月Aプロは、今年もサンティならではのオペラ作品

ほとんどのオペラを暗譜し、練習でも歌手とともに歌いながらタクトを振るサンティは、ヨーロッパでも超一流のオペラ指揮者として名高い。今年は何と大作ヴェルディ《アイダ》を全曲、N響定期で演奏会形式で上演してくれる。そのため、Aプロ初日金曜日は、通常より1時間早い6時開演になっている。



サンティ

Cプロでは、名曲ドヴォルザークの《チェロ協奏曲》が、日本チェロ界の至宝・堤剛との共演で行われる。チェロ・ファン必聴の一夜となるう。

●11月Aプロは、待望のプレヴィン弾き振りガーシュウィン

N響首席客演指揮者プレヴィンが、Aプロでガーシュウィン《ピアノ協奏曲》へ



プレヴィン ©Lillian Birnbaum DG

調》を弾き振りする。この難曲をプレヴィンは3度も録音していて、いずれも、他を寄せ付けない名盤となっているので、記念碑的コンサートになること必定だ。

●デュトワ+ショパン国際コン優勝者+N響が飾る、ショパン・イヤー注目の12月Aプロ。Cプロには大曲ブリテン《戦争レクイエム》

ショパン・イヤー(生誕200年)の今年、ショパンに因むあまたのコンサート・CD発売が続いているが、デュトワ指揮のN響と、ショパン国際ピアノコンクールの覇者がブックイングされたAプロほど、アニヴァーサリーを締め括るにふさわしい公演はないだろう。同プロにはまた、ストラヴィンスキー《うぐいすの歌》やドビュッシー《海》もプログラミングされているが、デュトワなら、これらの作品が秘める稀有の美しい世界を描きだしてくれることであろう。Bプロは、知性派ピエール・ロラン・エマールとのラヴェル《ピアノ協奏曲 ト長調》。どれほどの名演になるのか、予想のつかない組み合わせが実現する。

ここ数年、合唱付きの大曲を聴かせてくれるデュトワ今年の大作は、ブリテン《戦争レクイエム》(Cプロ)。デュトワによって、公演機会が稀有のコンサート用オラトリオやレクイエムを体験しているN響ファンに、日本とも関わりの浅からぬブリテン作品が贈られる。



デュトワ ©S.Takehara

■円熟の一流陣が次々に登場する2011年

●2月、チョンのマーラー《第3番》

まず目を引くのが、Cプロのマーラー《交響曲第3番》。マーラー・イヤーでもある2010・11年(生誕150年・没後100年)、N響ではマーラーの交響曲・歌曲のほとんどを網羅する。その1つが、チョンによる《第3番》。100分余の大作ゆえにライブに恵まれない大作だが、チョンと新国立劇場等で共演を重ねているメゾソプラノ藤村実穂子——バイロイトをはじめヨーロッパ各国で活躍——と新国立劇場合唱団を得て、2月Cプロで聴けるチャンスが巡ってくる。稀有のチャンスを逃す手はない。

Aプロでは、名手ジュリアン・ラクリンをベートーヴェン《ヴァイオリン協奏曲》で聴くことができる。そして、チョンが「レコード・アカデミー賞」を受賞した曲目、掌中のベルリオーズ《幻想交響曲》が用意されている。1歩も2歩も先を行く格別の《幻想》を聴くなら、チョン+N響の2月Aプロを!

●4月にノリントン再登場。今度はマーラー《巨人》をめぐり、ヘンシェルも伴って

2006年11月に初登場するや、「最も心

に残ったN響コンサート」第1位に輝いたノリントン。待望の再来団Cプロは、マーラー《巨人》を軸に、関連深い歌曲《さすらう若者の歌》と、マーラーがこの《第1番》からベルリン稿で削除した《花の章》を（《第1番》の外に置いて）組み合わせたもの。マーラーの歌ならこの人で聴きたい、と願うディートリヒ・ヘンシェル（バリトン）を伴い、N響+ノリントン+ヘンシェルという最高の布陣で聴くCプロが春に訪れる。

Aプロには、この古楽の泰斗がアプローチするエルガー《交響曲第1番》に興味を尽きないし、録音のたびに新鮮な響きをもたらした話題となるベートーヴェンも取り上げられており、注目の公演となることだろう。

Bプロはその掌中のベートーヴェンのみによるプログラム。昨今、ヴァイオリン界に新たな逸材を送り出しているチュマチェンコ門下のユリア・フィッシャー等と室内楽を活発に行っているマルティン・ヘルムヒェンが、新境地での《皇帝》を聴かせてくれることだろう。

●尾高忠明が、尾高尚忠作品、イッサーリスとのウォルトンを贈る5月

新シーズン定期に登場する唯一の日本人指揮者である尾高忠明は、2010年1月にN響正指揮者となり、来る9月には新国立劇場オペラ部門芸術監督に就任。日本指揮界の中枢を担う存在となる。Aプロ



尾高忠明 ©Masahide Sato

には、父君・尾高尚忠氏の《交響曲第1番》を自身の手で振る。記憶に留められる記念すべき公演となるだろう。

Cプロには、ウォルトンの《チェロ協奏曲》を、人気のステイヴン・イッサーリスの共演で公演することに。イギリス音楽のスペシャリストとしての真骨頂が発揮される。イッサーリス級の名手を得なければ聴かせられない稀にみる難曲だけに、聴き逃せないCプロである。

●アシュケナージが入魂のプロコフィエフ、シベリウスでシーズンを閉じる6月

桂冠指揮者アシュケナージが来シーズン携えてくるのは、交響曲全集を吹き込んでいるシベリウスや、首席&アーティスティック・アドヴァイザーを務めるシドニー交響楽団でシリーズを展開しているプロコフィエフ等。そのうち、Cプロに組まれているプロコフィエフの《ピアノ協奏曲第2番》は、ガヴリリユクとシリーズ第1弾となるCDもリリースしており、練り上げられた珠玉の共演への期待は大きい。

Bプロには、神尾真由子がプロコフィエフ《ヴァイオリン協奏曲第2番》に挑む。第13回チャイコフスキー国際コンクール優勝後、新境地を拓き続ける神尾だけに、N響との刺激的な共演に期待が高まる。

■注目の集まる次世代実力派

●11月B・Cプロは既に実力派として評価の高いシュテンツ

11月B・Cプロを振るマルクス・シュテンツは、ヘンツェのオペラ作品で指揮デビューし、ラッヘンマン等の同時代作品の初演や録音でも活躍。現代の音楽

ファンには知名行き渡った存在である。これほどの実力派が初来日だというから、驚きである。Cプロでマーラー《交響曲第2番「復活」》を用意しているが、現代の作品で培った感覚でどのようなマーラーを聴かせるか。未来を先取りする“新世代マーラー”の体験になるかもしれない。

Bプロには、チュマチェンコ門下のなかでも注目株のヴェロニカ・エーベルレが再登場。ベスト・ソリスト候補としても要チェックのBプロである。

●ニューイヤーを飾るフレッシュな息吹——2011年1月は、ロシアの新星・ペトレンコが初登場

1月Aプロで、自国のチャイコフスキーを振ってN響に初登場するのが、ロシアの新星ワシーリ・ペトレンコ。2008年にリリースイギリスで大きな話題となった《マンフレッド》が、N響で披露される。次世代のフレッシュな息吹で幕開けするニューイヤーになる。

●1月B・Cプロのマリンの凝りに凝った“編曲”プログラム

1月B・Cのイオン・マリンのプログラムは凝りに凝ったもの。ブラームスで統一されたBプロだが、実は、《ハンガリー舞曲集》からは後半のドヴォルザーク編曲の5曲、《ピアノ四重奏曲第1番》のシェーンベルク編曲版に、ブラームスがハイドンの主題をもとに変奏した作品56a。Cプロは、ムソルグスキーの《はげ山の一夜》ではリムスキー・コルサコフ編曲とともに一部に原典版を使用。ラヴェル編曲のムソルグスキー《展覧会の絵》と、ラヴェルの《クーブランの墓》というプログラム。コラボレーションの妙を存分に楽しめる、類まれなプログラムを打ち出している。

●同時代作品に手腕の冴えるノットが、響きの妙を追究した2月Bプロ

「Music Tomorrow」でもお馴染みのジョナサン・ノット。現代の音楽の優れた演奏団体の1つ、アンサンブル・アンテルコンタンポランで指揮する機会を度々もつなど、同時代作品への嗅覚も鋭い。室内乐的響きの妙が求められるショスタコーヴィチ《交響曲第15番》に向けて、美しい音空間で会場を満たすアルヴォ・ペルト作品、パーカッション・ソロを伴うドルマンの《フローズン・イン・タイム》日本初演を配し、同時代の空気のなかでショスタコーヴィチに到達する新鮮なプログラミングはさすが。

●ヴェデルニコフ、定期に登場(5月B)

昨年3月、「N響オーチャード定期」にズヴェーデンの代役として急きょ初来日したヴェデルニコフ。低迷していたボリショイ劇場のオーケストラを短期間で立て直した辣腕の中堅である。

N響にはスヴェトラノフのような伝説的巨匠や、燃え盛る火のようなゲルギエフなど、印象深いロシア系指揮者が訪れているが、新世代の2マエストロ——ペトレンコ、ヴェデルニコフ——がいよいよN響と共演する時代を迎えることになる。

すでに“本格派”としてファンを獲得しつつあるマケドニア出身のピアニスト、シモン・トルプチェスキがこのBプロで弾くのがこれまた、チャイコフスキーのなかでも珍しい第2番のピアノ協奏曲。バランシンが振り付け、バレエ界でも(のほうが)知名度の高い《ピアノ協奏曲第2番》と、ラフマニノフ《交響的舞曲》というプロは、歌劇場を本拠にするヴェデルニコフの感覚溢れるものだろう。ロシアの劇場芸術の香り高いプログラムが楽しみである。

Music Tomorrow 2010 特別対談

山根明季子 (2010年度、N響委嘱作曲家) vs. 白石美雪 (音楽評論家)

「音として感じている世界を標本化したい」

サブカルチャーが好きで、岡崎京子をはじめとする漫画に共鳴し、できれば身の回りにはきらきらした飾りなど、きれいなものを置いておきたい。「自分の作品も同じ。音として感じている世界を標本化したい」という山根明季子さん。「Music Tomorrow 2010」での《水玉コレクションNo.06》初演にむけて、ユニークな世界観から新作の意図まで、じっくりお話をきいた(4月24日、高輪のN響練習所にて)。



白石美雪(左)と山根明季子(右)

「いつでも自分のまわりに音があって、『この世界に生きている=音を感じている』」

- **白石美雪** (以下、**白石**) : 山根さんは創作についての論考「音を視る」という文章で、「私の視ているものは『音』であり、聴こえてくる音は全ての感覚を経た『音』として感じられる」と書いていらっしゃいますね。これは視覚的なものと聴覚的なものが結び合っているということなのでしょうか。
- **山根明季子** (以下、**山根**) : そうですね、いつでも自分のまわりに音があって、「この世界に生きている=音を感じている」ということなんです。だから視覚に限られたことではなくて、質感なんですね。たとえば、硬い音とか柔らかい音というのは一般的にも何となく想像がつくと思うんですけど、触覚とか味覚とも結びついている。五感ですね、全体=音です。
- **白石** : そのように感じた世界としての「音」を標本化して、「音のかたち」をデザインするのが山根さんにとっての創作ということなのですが、具体的なかたちにテーマを絞ったのは2006年の《水玉コレクションNo.01》から?
- **山根** : いえ、多くの人に聴いてもらえるようになったのはその曲からですけれど、それ以前にも第5回武生作曲賞入選作《Re-Collect》(2005)でドット(水玉)をマテリアルとして用いていますし、同じ年の《SKEPTIK》なども音型という概念から考えています、もっともっと遡ることができます。

「バックボーンが異なる戦後世代」

- **白石** : 山根さんの目には1960年代の前衛、たとえばブルーレーズのようなモダニストはどんな風にみえます?

●**山根**：まっすぐなエネルギーがあるなどは思うんですね、戦後でこうすべてが破壊されて、これから作っていかねばいけないという時代にあるわけですから。(それに対して)私たちの時代って、岡崎京子さんの漫画に描かれていたんですけども、何もかも与えられているがゆえに何も作ることができないというか、物質的には豊かなんだけど、という厭世感があるので、曲のもつバックボーンが全くちがうと思います。

●**白石**：前衛の呪縛がとけたポストモダンの時代ともちがう？

●**山根**：なんていうか、ここまでできてしまうと、もう膨大すぎるわけですよ。ネットでも素人が投稿して何もかもあるし、ほんとにジャンルも超えて、何でもかんでも耳に入ってくるので、私の場合は「この時代がこうで、この時代はどようで」という風に時代として考えるのではなく、すべてが同等になってしまっているというか、好きなものだけ拾って、自分のなかに取り入れている感じ。歴史を追ってもきりがないところまできている。もちろん一人一人はおもしろいんですけど。

「一瞬一瞬ごとの響きをどうコントロールするか」

●**白石**：自分の方向を決めるモデルとなった作曲家はいますか。

●**山根**：すごく好きなのはクセナキスやリゲティですね。クセナキスの曲は数学理論に基づいていますが、彼自身は出てきた効果をすごく大事にする。そこに共感できるものがあって、出てくる結果や音像が私のなかでも知覚的に構成されるんですね。リゲティもそうですけれど、五感で音の作り、質感を感じることができて、とても惹かれる作曲家です。

●**白石**：クセナキスやリゲティにはシステムを自ら構築して書いていく部分がありますよね。山根さんの場合は独自の音のシステムはありますか。

●**山根**：《水玉コレクションNo.01》では音像ごとに「こういう音像をつくるにはどうしたらいいか」と考えて、システムというか、音の配列の決まりを作ったりしていたのですが、結局、関心があるのはその一瞬一瞬ごとの響きをどうコントロールするかということなんです。自分が感じるままに音にするにはどういうシステムを使ったらいいかわからなくて、全体の枠組み、たとえば水玉が1つ1つあらわれては消えてというのを見ていくというような枠組みは決めますが、いまは何のシステムも使わずに書いています。とにかく自分の感覚だけを頼りに書いているので、実際に音にする段階で、自分のソルフェージュ能力の問題や経験値とは別に、どの演奏家がどのように弾くか、ということや、会場の空気によっても全くニュアンスが変わってくるんですね。質感という微妙なものを扱っているだけに、そこが音楽をつくり上げるうえで難しいところでもあり、逆にとても面白いところでもあります。

●**白石**：時間的な展開はどう作るのでしょうか？

●**山根**：あの、そうですね。とくに最近はいつ始まってもいつ終わってもいいという作品をよく書いています。わかりやすいように、たとえば美術作品を鑑賞するかのよう、ひとつの展示の部屋に入ってきて、ある程度みてからその部屋を閉じるまでの時間という

風に説明したりしますけれど。今回の新しい作品もそういうところがあります。

「水玉そのものにポップな毒性のイメージが」

●白石：《水玉コレクション》というシリーズは1つ1つ編成もちがうし、同じ水玉でも1つ1つ異なる部分を描いているようにみえるのですが、今回の《No.06》はどういうところがこれまでと同じで、どういうところがちがうのでしょうか。

●山根：オーケストラ編成の曲ですと、《No.01》は全体としての模様だったのですが、より編成が近い《No.04》ではあらわれては消えるものを1つ1つじっくり視ていくものだったんですね。この「1つ1つ視ていく」というスタンスは《No.06》でも変わりません。1つ1つの質感を細かく描ききるということをしています。

それで何がちがうかという、どれだけその1つ1つをもっと装飾過多に書くか、私はそれを「毒に毒に」って言っているんですけど(笑)、それをどこまで追求できるかをこの曲で試行錯誤しているんです。水玉というモチーフを使う一番の理由は、水玉そのものにポップな毒性のイメージがあるからなんです。ガーリーでピンクッシュなものはオーケストラ作品にあまりないと思うし、私はそういうものが作りたいんですね。それで、ポップな毒性をどうやったら作れるかを考えていまして、いままでいろいろ書いてきたんですが、どうも透明な感じがしたりして、もっともっとできると思うんです。

●白石：山根さんのいう「毒」というのは欲望でしょうか。

●山根：欲望も含まれると思うんですけど、やはり負の部分ですね。普段は表に出ている部分。草間彌生さんがとくにすごいなと共感する部分は、水玉に囲まれることによって自己消滅してしまうという世界ですね。それと、(水玉から連想する)少女は無垢であるがゆえの残酷性がある、しかもポップであるがゆえに罪であるというか…。自分が描きたいのはそういうものですね。

●白石：山根さんの曲は協和音程も多いし、ずっと入っていけるんだけど、騙されてはいけない、という怖さが秘められている気がしてきました(笑)。そこがまさに曲の存在感につながっているのでしょうか。今回の作品はどのように聴いてほしいですか。

●山根：欲を言えば、私が経験しているのと同じように模様を視てほしいんです。もしかすると、「ああ、水玉ね。ああ、みえたよ」というだけかと、誤解されるかもしれないのですが、たとえば美術作品をみて、「ふうん、ああ、丸だね」と通り過ぎるのではなくて、丸があった、だけど、そこから感じる何か、つまり心が動かされる何かがあるなど。そこまでお客さんに届けばうれしいなと思います。

(しらいし・みゆき 武蔵野美術大学教授)



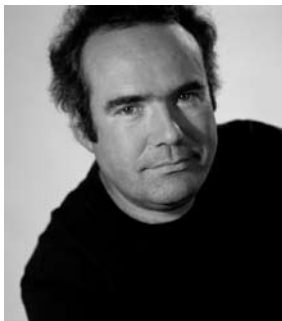
山根明季子



©長崎新聞社
日本を代表する
作曲家の1人、藤家溪子



フィンランド作曲界
の泰斗、サリネン



©Alix Laveau
世界を牽引する
フランスの旗手、ダルバヴィ



©Katie Vandyck
現代音楽のスペシャリスト、
指揮者のロフエ



©Tsutomu Tai
藤家作品のソリストを務める
世界的ギタリスト、山下和仁



現代最高峰のチェリスト、
ウイスベルウエイ

- 山根明季子／水玉コレクションNo.6 (2010) [N響委嘱・世界初演]
- 藤家溪子／ギター協奏曲 第2番「恋すてふ」作品60(1999)
- アウリス・サリネン／室内楽 第8番 作品94「木々はみな緑」(2009) [日本初演]*
- マルク・アンドレ・ダルバヴィ／まなごしの根源(2007) [日本初演]

指揮：パスカル・ロフエ

ギター：山下和仁、チェロ：ピーター・ウイスベルウエイ*

2010年6月22日(火) 7:00pm 東京オペラシティ コンサートホール

【料金】 一般 …………… S:5,000円 A:3,000円 自由席:1,000円
ユースチケット(25歳以下または学生) … S:2,500円 A:1,500円
グループチケット(まとめて2席以上) … S:4,000円 (1席につき)

※ 定期会員は、一般S・A各500円割引となります

※ 会員割引、ユースチケット、グループチケットの取り扱いは、N響ガイドのみとなります

お問い合わせ：N響ガイド ☎03-3465-1780

営業時間・平日10:00am～6:00pm(6/7は休業)